

観測瑣談

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々倉, 航三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006099

観 測 瑣 談

佐 々 倉 航 三

[A] 昨年(1961)1月5日の夕暮であつた。その日は珍らしく静岡名物の西風も吹かず終日おだやかな天気であつたが、午後3時頃自宅から約2軒ほど離れた山裾の道を東へ向つてたどりながらふとふり返つたとき、西空の美しさに思はず讃嘆の声を放ってしまった。晴れた空には幾つものレンズ雲(レンズ状高積雲)が点点として浮び、またその中のいくつかは二つづつ組合わさつてツヅミ形になっているのである。そして西方の山波から出た高積雲の群団は天頂あたりまで延びてきており、その一部の縁辺には緑とピンクを主とした彩雲さえ現われているのである。昔はこれを五色の雲、景雲、又は紫雲、瑞雲などともいったそうである。しかもその高積雲の群団のふちは文字通り雲形定規で形どられたように滑らかな曲線を描いていてまことに和やかな眺めであつた。しばらくして太陽は西の山の端に近く迫つて夕焼空となり、太陽面を掩うたツヅミ雲は暗黒色に変じたが、そのツヅミ雲のふちは金色に輝いてえもいわれぬ壮厳さをもたえているのではないか。風は全くなし四辺は静寂であり、私はこんなにまで美しく平和でしかも厳粛な感じを受けた夕空を経験したことはなかったのである。

数年前ロンドン大学のゴールドマンリイ教授が著わした“英国の気候と風景”という本には朝焼や夕焼を初め空と地上の風景とを組合せた美しい天然色写真が沢山のついていたし、書中の叙述もまた理にかどだたずさりとして情にもおぼれずといった調子で、この本はまことに地理学的気候学書の典型的なものであり、かねて私の理想としたものが実現されたようにさえ思ったが、この夕空を見てこの本のことを思わずにはいられなかつた。

当時の日本付近における気象状況を述べると1月4日に北海道と関東地方とにあった低気圧(それぞれ998mbと1002mb)は5日には融合してして頗る優勢(966mb)とはなつたがすでにオホーツク海の南部に去つており、本邦における気圧傾度は奥羽地方以北は尙大きかつたが関東地方から西の方はずっとゆるやかになつていた。

静岡地方気象台の観測結果を見てもこの日は珍らしく西風が弱く、平均風

速は1.3 mに過ぎず，特に10時から南寄りの海風が吹き初めて17時まで続いている。最大風速さえ14時30分の5.3 m (SE) で瞬間最大は14時32分の7.8 m (SE) であった。天気は9時，15時，21時の雲量がそれぞれ4，7，8であって概ね晴天であった。

このように静岡では朝から風は弱かったが御前崎では午前中は10 m以上の強風が吹いており，午後からは風速が落ちて6～7 m程度になっている。午前中の静岡と御前崎の地上風を比較すれば両者間に著しい相異のあることに気づくであろう。この事実は冬季若狭湾から濃美平野を通して伊勢湾に出で，それから太平洋岸沖を東に向う季節風の吹き抜けルートが御前崎の沖を通過するためであることはかねてから指摘されているところである。当日御前崎における平均風速は10.0 % (WとWNW) で最大は17.2 % (W，02時12分)，最大瞬間風速は23.3 % (W，02時24分) であった。

午前8時30分における御前崎の上層風は弱く，その後の上層風観測がないので分らないがこの日の御前崎付近は午前中の地上風だけが強かったのであり，御前崎，静岡付近は地上も上層も一般に風が弱かったのではないかと思われる。

彩雲は大気の静かな時に生じ，水分も多過ぎず少な過ぎず気象学的に考えても平穏で祥瑞たるに適すると藤原先生も書かれているが，当時観察した筆者も全く同感であった。しかしレンズ雲は一般には上層風が強いときに現われる場合が多いとされているのでこの点にやや矛盾を感じる。

以上は理論的考察抜きの甚だつまらぬ記述にすぎないが観察したままを記して残しておきたい。

	1961年1月5日の地上風				高層風		
	静岡		御前崎		御前崎		
1時	NW	0.8 %	W	15.3	8時30分観測開始		
2	SW	1.0	W	15.7	100 m	30°	3 %
3	S	0.3	W	15.5	200	24	2
4	WSW	0.3	W	14.3	300	54	3
5	WSW	1.0	WNW	13.0	400	60	4

6時	NNW	0.7 $\frac{m}{s}$	WNW	12.8	500 m	63°	6 $\frac{m}{s}$
7	W	0.7	WNW	10.3	600	71	7
8	NNW	1.0	W	9.5	700	80	7
9	W	1.0	W	11.0	800	89	8
10	S	1.5	W	10.0	900	98	8
11	S	3.0	WNW	10.7	1000	110	9
12	SSW	2.2	W	12.0	1100	134	9
13	SE	2.3	WNW	9.2	1200	163	7
14	SE	1.8	W	8.8	1300	202	5
15	SE	4.2	W	8.0	1400	285	4
16	SSE	2.2	WNW	7.2	1500	316	7
17	SE	1.2	WNW	6.0	1600	308	8
18	NNE	1.0	WNW	6.5	1700	310	9
19	ENE	1.2	WNW	6.5	1800	317	9
20	—	0.2	WNW	6.7	1900	301	13
21	W	0.3	WNW	7.0	2000	290	13
22	N	1.0	W	5.8	2100	279	13
23	WNW	2.3	W	8.0	2200	286	13
24	WNW	2.0	WNW	9.2	2300	284	13
					2400	285	15
					2500	284	15
					2600	280	14

〔B〕 富士山の山雲については阿部正直博士を初め幾多の研究調査報告がある。いまさら特に珍らしいというほどのものではないが、台風通過直後の初秋に現われた富士の山雲の姿を一つ記録にとどめておきたい。

図は昭和25年(1950)9月4日6時10分に横浜線相原駅で南西方に展望した富士山の観察である。前夜日本海沿岸を通過したジェーン(Gaun)台風は中心は4日9時には北海道の中央部付近にあって990 mbを示し、東北地方以北は高気圧傾度はやや急であるが関東地方以西は傾度がゆるくな

っており天気も恢復していた。

当日6時の富士山頂の風はWSWの25.5%で上層ではまだ風は強く吹いていた。SW方向から山腹を強制上昇した気流は積雲形の雲となって富士山の中腹から目測6000m位にまでも高く延びて同山を掩い、その右端（おそらくNE端であろう）には笠雲形のものが数本鋭く突き出ていたのが奇異であった。内一つだけの笠雲が高く離れていた。

富士山を包んだ積雲形のものは植野隆寿氏のいう背負雲であろうが、その右端から笠雲がいくつか突き出している状況が面白かった。

